ボランティア活動

石巻市での炊き出し

5年電気電子工学科　笹 原 舞 騎

５月14日、９月17日の２日間、宮城県石巻市で炊き出しのボランティア活動に参加しました。キッカケは、私が小学校の時に所属していたサッカースポーツ少年団「稲穂サッカースポーツ少年団」が母体となった、「稲穂ファミリースポーツクラブ」で支援活動を知ったことでした。友人が宮城県にいたため、震災後から「何かできることをしたい」と思っていた矢先にこの活動を知ったことで、自主的に参加することに決めました。その後、同じ団体でまた９月にも支援活動をするということを知って、もう一度石巻市で炊き出しをしてきました。

一度目の５月14日は小学生２人、保護者さんやスポーツ少年団の大先輩たち、大阪から支援活動に来てくださったプロのシェフ、稲穂ファミリースポーツクラブ代表の村田久忠さんやコーチの後藤敏一さん、そして私の約30名で避難場所になっている「石巻市立飯野川第一小学校」に行ってきました。二度目の９月17日は学生の私１人と保護者、シェフ、田川地区そば生産グループの方々、村田さんの約25名で避難場所になっている「石巻市立湊小学校」に行ってきました。

５月に行ってきた際、被災地に向かうバスから見える景色は、少しずつ震災の被害を実感できるものへと変わっていきました。道路はボコボコ、傾いた電柱、集められた瓦礫の山、ひび割れた住宅の壁やずれたままの瓦屋根・・・石巻市に入ると想像以上の光景でした。商店街のシャッターは閉まらないからどうしようもない状況、板で打ち着けてあっても閉まっていないまま。津波に浸かった車はボロボロで使えないため、積まれて山になっていました。更には地盤沈下。沈下したため、今まで陸地だった場所にも満潮になると海水が押し寄せ、潮が引いた後も水たまりが残ったままでした。そんな石巻市の惨状を目の当たりにし、支援活動の目的地に向かいました。

目的地に到着後、炊き出しの準備のためトラックから食材やガスコンロ等を降ろしていきました。避難所の方々はいつもおにぎりや缶詰等の配給の冷たい食事しか口にしてないので、「温かい食事を食べて笑顔になってもらいたい！」とがんばって準備をしました。提供していたメニューにはシェフの考案したものもあって、温かいものや新鮮な野菜を提供してきました。避難所の方々に直接手渡しで食事を提供していたのですが、皆さんは「ありがとう」って喜ばれて受け取ってくれました。その時は「喜んでもらえてよかった」と素直に思いました。中にはおかわりしてくださった方もいて、「早く元の生活に戻って、みんなが温かい食事が食べられるようになるといいなあ」と思いました。

二度の支援活動を通じて、同じ国に住む人が苦しんでいることを、実際に見て、実際に触れて、実際に感じてきました。そんな被災者の方々の、笑顔を少しでも取り戻していただけたことは大変に嬉しかったです。今現在、石巻市の避難所は全てなくなり、仮説住宅や自宅または待機所で生活を送っているようです。１日でも早く被災地の復興、すべての被災者の皆さんに笑顔が戻る事を祈るばかりです。

仙台市でのヘドロ除去

5年物質工学科　石 塚 啓 介

私は４月29日に宮城県仙台市宮城野区の宮城野体育館内に設置されたボランティアセンターを訪ね、主に家屋の泥を除去する作業を手伝いました。この活動に参加したきっかけは、災害現場から非難してきた知人から「ニュースで見るより現状は遥かにひどい」と聞かされたためです。何ができるのか、インターネットで検索するとボランティアセンターの設置が間に合っておらず、他県からの参加を断る施設が多い状況でした。そんな中、宮城野体育館のボランティアセンターでは積極的に活動が行われていたので、早速連絡をしました。

参加当日、早朝５時に家を出発しバスと電車を乗り継ぎ、宮城野体育館に着きました。受付を済ませ、ボランティアセンターに入ると待機している人数が30人ほどいました。参加者に対し現場までの送迎が間に合わない状況でした。「この時期のボランティアなんて必要なかったのかな」などと考えながら、待つこと４時間、時計は午後１時をまわっていました。やっと私の番がきたので10人グループで現場へ向かいました。

現場へ向かう途中の道路脇には、そこにあるはずの無い家具や船が放置され、デコボコと歪んだ道を進みました。到着すると被災者の方からの第一声は「遅いのよ!!」の一言でした。全員が動揺しましたが、私達はすぐに作業に取り掛かりました。汗だくになりながら泥まみれの農具や家具を屋外に集め、スコップでヘドロをかき出しました。辺りはヘドロの生臭いにおいが充満していました。作業を進めていると被災者の方から「大変でしょ。私達は毎日やらないと棲む場所も無いの。」と言われ、あの第一声の意味を理解しました。そこで私は、ボランティアに対する気持ちがあまりに安易であったことに反省しました。災害で全てを失いやっとの思いで生き延び、人手はいくらあっても足りない状況の中で必死に復興に取り組む人がいることを実感しました。

作業は午後４時で終了しました。正味３時間しか作業ができなかったことに悔いを残しながら帰ろうとすると、被災者の方に「ありがとう」と言われました。帰りの送迎を待っているときボランティアだと気づいた通行する車の窓から「ありがとう」と言ってくれる人もいました。人間の強さはこのような温かみの中に存在するのかもしれないと思いました。

帰り道、海の近くを通ったとき車から外を見ると、辺り一帯何も無い場所を通りました。はじめは津波の脅威に驚くばかりでした。少し進むと川をふさぐような屋根やゴロゴロと転がった車、その場で手を合わせしゃがみ込む人もいました。人間の小ささを目の当たりにして、あまりの悲惨さに涙がこぼれました。そして、ボランティアが入ることのできないような場所は多く存在する現実を知りました。最近のニュース報道でも復旧作業が難航していると聞きました。しかし、時間が経過すると共に忘れ去られてきていることもまた事実です。今一度、ひとりひとりがアクションを起こす必要があると思います。

被災者の方々の明るい未来のために一刻も早い復興をお祈り申し上げます。

福祉施設の夏祭りをお手伝い

4年物質工学科　関　　亜 美

私が所属している鶴岡高専バドミントン部は、毎年恒例の、夏休みのボランティア活動として、鶴岡市藤沢にある福祉施設、“愛光園”で夏祭りの手伝いをさせていただいています。

このボランティア活動のそもそもの始まりは、六年前、バドミントン部が行っている夏合宿での早朝ランニングの際、愛光園の駐車場をお借りして体操をしていた時に、職員の方から「夏祭り手伝ってくれませんか。」と声をかけられたのがきっかけだったそうです。

今年は、８月９日の夕方に夏祭りがあったため、午前中に会場設営として、模擬店のテントの設置と物品運びを手伝いました。立っているだけで汗が出てくるような炎天下の中での活動で、とても大変でしたが、愛光園の方と協力することで、夏祭りの会場をスムーズに作り上げることが出来ました。愛光園の方々は、私達の協力によって、より短い時間で会場設営が終わったことに感謝してくださり、ご好意で夏祭りの模擬店の食券や、部活の際に飲めるスポーツドリンクを頂き嬉しかったです。夕方の夏祭りでは、たこ焼きや焼きそばなどの様々な模擬店が並び、ステージでの企画もありました。地域の方々とバドミントン部の部員で一緒に楽しむことで、地域の温かさに触れることができました。

翌日、８月10日は、テントたたみ、物品運び、体育館の片付けが仕事でした。この日も暑くて大変でしたが、愛光園の方々から「ありがどの」や「部活頑張っての」など、たくさんの言葉を頂き、嬉しく感じたのと同時に、その後の部活動の励みにもなりました。また、仕事が終わった後、かき氷をご馳走になり、暑い中仕事をした私達への心遣いにも感激しました。

物品運びを手伝う部員

この活動を通して、普段の部活動ではできない、地域の方々との交流を体験することができました。そして何より、地域の方々あっての鶴岡高専であるということに気が付きました。今回のボランティアを行って、改めて地域の方々との関わりを今後も大切にしていきたいと思いました。地域の大切さ、温かさ、繋がりなど、多くを学んだボランティア活動は私達にとって貴重な経験であり、来年以降も是非続けていきたいです。

仙台高専図書館での配架作業

事務部総務課　佐々木　愛

３月11日から２ヶ月が過ぎた５月中旬、本校職員８名が仙台高専名取キャンパスで、被害を受けた図書館の配架作業支援を行いました。

主な作業は分類ごとに本が詰められた段ボール箱（約2,200個分）から元の棚に本を並べ直すことです。１週間という短い期間でしたが、同じく支援に訪れていた八戸高専、奈良高専の皆さんと一つになり、一日でも早い図書館復旧のために全力で汗を流しました。

地震直後の館内の写真を拝見したところ、本棚という本棚からおびただしい数の本が崩れ落ちて散乱し、床に堆く積み重なっていました。また、本棚が折り重なるように倒れた箇所もありました。写真で目にしただけでも呆然としてしまうその本の海から、一冊一冊拾い上げて仕分けされた仙台高専の皆さんに頭が下がる思いでした。同時に、早い時期からの人的支援の必要性も強く感じました。

今回の作業の中で私たちができたことは微々たるものですが、同じ東北の高専として、また最も近い隣人として、継続的な協力体制を作っていくことが大切であると感じました。

汗だくだくの作業です

祈りの曲を演奏して

制御情報工学科4年　半 田 直 弥

11月27日、津波の生々しい爪痕が残る石巻市立住吉中学校の体育館に慰問演奏に行き、モーツァルトのレクイエムを演奏してきました。合唱は鶴岡土曜会混声合唱団で、ソリストに品田昭子さん、「ウッドランドノーツオーケストラ」の伴奏でした。レクイエムとは死者の魂を鎮めるためのミサ曲です。土曜会では今年、広島の原爆をテーマにした曲も取り上げています。その歌詞の中に「私はただ信じるしかない。怒りと痛みと悲しみの土壌にも、喜びは芽生えると、死によってさえ癒されぬ傷も、いのちを滅ぼすことはないと」とあり、私は共感していました。今回の石巻での慰問演奏会でも、私はこの歌詞のような気持ちで演奏に臨みました。会場に聴きにお越し下さった方の中には滂沱の涙を流しておられる方もいて、私は改めて震災の深い傷跡を知った気がしました。「私も被災地のために微力ながらもお役に立ちたい」と思っていたので、今回の体験は自分にとって非常に大切なものとなりました。

祈りの曲を演奏して